

郷土の会だより

発行責任者
岡村昭則

ウォーキングサークル

蕨宿 (12月15日)

天谷 範夫

蕨駅改札口に私を含め、10名が集合。駅西口から中山道に向かって、商店街を進む。本日最初の見学は、長泉院ですが、鐘楼が二階建の屋上に有る為、うまく写真が取れず諦めました。中山道一つ手前の裏道を南に進み、観音堂、玄蕃稻荷とみて、蕨宿入り口に。ここから、まずは、歴史民俗資料館分館へ。もとは織物買継商の家で、庭、建物の管理状態も良く手入れされていました。次に向かった歴史民俗資料館は隣接して本陣入り口が再現されています。蕨宿の地域模型や当時の食事などの展示が有りましたが、全体に内容がいまいちでした。行程を入れ替えて、蕨城址公園へ向かい、ここで昼食、休憩。

午後は隣の和楽備神社からのスタート。中山道に戻り、更に北へ向かいます。地藏堂、三学院により三重塔、鐘楼などを見て中山道に戻り、旧家や民家を見ながら、春日神社へ。ここからは、帰り行程で、17

号を渡り、川沿いの桜並木を少し歩き、蕨高校手前から駅へと向かいます。駅前にてお茶タイム。今年最後のウォーキング。話も色々はずんだようです。

蕨郷および蕨宿の歴史

文献上、地名「わらび」の初出は1352年に表された『洪川直頼謙状写』(賀上家文書)に見える、「武蔵国蕨郷上下」である。地名の由来については諸説あり、「蕨火(わらび)」説と「蕨」説に大別される。「蕨火」説では、源義経が立ちのぼる煙を見て「蕨火村」と名付けた、在原業平が蕨を焚いてもてなしを受けたことから「蕨火」と命名した、などといわれる。「蕨」説には、近隣の戸田郷や川口郷にも見られる「青木」「笹目」「美女木(びじよぎ)」などといった植物由来地名と同様、蕨(ワラビ)が多く自生する地であったことに基づく命名とするもの、僧・慈鎮(じちん)の歌「武蔵野の草葉に勝る早蕨(さわらび)を 実(げ)に紫の塵かとぞ見る」をもって「蕨」としたと見るもの、などがある(「蕨市歴史」も参照)。

平安時代末期に金子家忠の一族が保元の乱(1156年)や平治の乱(1159年)を落ち延びて蕨本村(法華田 ぼっけだ、現・錦町5丁目付近)に住み着き、蕨郷の開発に着手したと伝えられる。戦国時代には蕨城(足利氏一族・洪川氏の居城)があり、市も開かれていたため、宿場として成立する基礎があった。蕨宿の成立時期については江戸時代初期の1612年とする説が有力で、在地有力



『木曾街道 蕨之驛 戸田川渡場』

1835-1837年 深齋英泉 画

蕨宿の近隣にあつて一帯の水運を担う戸田の渡しが描かれている。人馬の別無く舟に乗り合い、白鷺が舞う戸田川を往く、天保の頃の人々ののどかな様子である。対岸の渡し場に続く道の左右には戸田村の家々が見える。渡船権はこの村が握っていた

蕨宿の特徴道中奉行による1843年の調べで、4町からなる町並み10町(約1.1km)。宿内人口2,223人(うち、男1,138人、女1,085人)。宿内



江戸の昔、蕨宿の周りには用水と防備を兼ねた構え堀が巡らされていた。堀に面した家々には小さな跳ね橋が設けられていて、早朝下るされ、夕刻になると跳ね上げられた。宿場の出入口である上下の木戸も同じ時刻に閉じられるので、夜の蕨宿は隔絶された小さな空間となっていた。跳ね橋は、北町の一角に一つのみであるが、今日まで残されている(徳丸家の跳ね橋)。このように防火に怠り無かったが、しかし、蕨宿はしばしば大火に見舞われていた。それでも古民家などが多数健在で、かつての面影を伝える町並みを残している。

家数43軒(うち、本陣2軒、脇本陣1軒、旅籠はたこ23軒。問屋場1箇所、高札場1箇所)であった。通常客が利用する平旅籠は問題無かったが、蕨宿の飯盛旅籠および飯盛女(めしもり、おんな)は強引な客引きがひどく、旅人は難儀したという。そのため、江戸末期には旅人が安心して泊れるよう、平旅籠の講と呼ばれる旅館組合が組織されていた。なお、戸田の渡し(後述)の川留めに備えて東隣りの塚越村にも本陣が置かれ、二の本陣、あるいは東の本陣と呼ばれた。



資料館分館



本陣



和楽備神社



旧家



地藏堂



三学院



三学院本殿



旧家



春日神社

ウォーキング(サークル計画外) 義士祭
12月14日

天谷 範夫

サークル計画外で、義士祭を計画しましたが、雨の為計画は中止となったものの、予定を空けて有ったので、個人で行ってききました。祭と言っても、お寺の法要が主たるものなので、門前や、境内の露店が色を添えるといった感じです。午後3時過ぎると義士の装束に扮した行進が見られるのですが、私は雨の中を待つ気力は持つて無かったので昼前に上がりました。写真で雰囲気を見ていただければ幸いです。

元禄14年3月14日(1701年4月21日)、江戸城内松の廊下で、赤穂藩主浅野内匠頭が吉良上野介に突然斬り掛かる(松の廊下事件)。事件が勅使饗応の直前だったので、將軍・徳川綱吉は殊のほか激怒し、浅野内匠頭に即日切腹を、赤穂藩にはお取りつぶしの断を下した。一方の相手の吉良上野介に対しては、手向かいしなかつたため何のおとがめもなし。この裁きを片手落ちと考えた家老の大石内蔵助以下の赤穂藩の藩士たちは激怒無抵抗で城を明け渡すも、吉良上野介に対して密かに仇討ちを計画し、元禄15年12月14日(1708年1月30日)、大石以下47人の赤穂浪士が吉良邸に侵入、吉良を討ち取って主君の仇討を果たした。



泉岳寺門前



大石内蔵助像



泉岳寺山門



四十七士墓地



四十七士墓地



法要